

年間第三十三主日

2010.11.14

ルカ 21・5-19

11月も半ばとなり、教会の典礼暦は一般の暦よりも一足早く、来週の日曜日の王であるキリストの主日をもってこの一年の私たちの信仰の歩みを締めくくろうとしています。今年の年間主日のミサの中で、私たちはルカ福音書に記されたイエスのみことばに耳を傾けてきました。今日のルカ福音書21章5節から始まるイエスのみことばは、十字架の受難へと向かわれるイエスが公に語られた最後の説教です。今日私たちが聴いたのは、そのイエスの最後の説教の初めの部分ですが、この説教が終わるとルカ福音書は22章からイエスの受難の出来事を語り始めます。イエスの受難を前にした最後の説教が、それまでのユダヤの人々が信仰の拠りどころとしていた神殿の崩壊から始まるこの世の終末を告げる内容となっていることには深い意味が込められています。十字架の受難に向かわれるイエスは、後に残される弟子たちが経験することになるであろうあらゆる苦難を見通され、弟子たちがそれらの苦難の中を生き抜いて、イエスの弟子として、それこそが彼らが迎えるべき真の終末である、再臨の人の子イエス・キリストの御前に立つことができるよう励まそうとして、これらのみことばを語り聞かせておられるのです。

今日の福音でイエスは終末について語っておられますが、世の終わりのいわゆる終末の教えは新約聖書のイエスの福音に始めて登場するものではありません。今日の第一朗読で聴いたマラキの預言にあるような、終末における神のさばきを告げることばは、旧約聖書の預言者たちのことばの中に数多く見出すことが出来ます。今日のマラキの預言では「見よ、その日が来る。炉のように燃える火が。」というように、終末の神のさばきが表現されていますが、「その日」「主の日」という表現で、預言者たちは終末の神のさばきについて語っています。モーツァルトのミサ・レクイエムの中の「ディエス・イレ」の歌詞で一般の人にも知られるようになった、終末における神のさばきは、確かに、私たちにとって恐ろしいものです。「ディエス・イレ」とは「怒りの日」という意味で、このことばは終末における神のこの世の悪に対する怒りの審判を意味しています。最近一部の人々の心を不安に陥れている終末の世の終わりを記述するいわゆる「・・・の預言」の類も、多くの場合、聖書の終末の教えにインスピレーションを得ていますが、聖書が語る終末の教えは、それらの書物にあるような、世の終わりに起こる未曾有の天変地異を語ることに主眼があるではありません。

聖書が語るいわゆる黙示文学的な終末論は、この世の悪に対する神の決定的

なさばきによる勝利を告げ、この世の悪のもとに苦しみ続ける神に忠実を尽くす者たちへの、神のさばきによる絶対的な救いを語ることによって、信仰者たちを励ますことにその意図があるのです。

今日のマラキ預言者のことばをもう一度読み返してみると、「見よ、その日が来る。炉のように燃える日が。」と告げられており、炉のように燃えるその日は終末の神のさばきの日を意味しています。「その日が来ると、高慢な者、悪を行う者はすべてわらのようになる・・到来するその日は、彼らを燃え上がらせ、根も枝も残さない。」高慢な者、悪を行う者とは、その高慢のゆえに自分たちの力を過信し、この世界の秩序の与え主である神を無視し、自分たちの欲望に従って、神が与えた人間として歩むべき掟の道を弁えず、弱い立場にある人々を不当に苦しめている者たちです。そのような者たちと彼らの仕業の全ては、炉のように燃える、神の終末のさばきの日が到来するその日には、炎の中に投げ入れられたわらのように、滅びの火の中で燃やし尽くされると預言者は告げているのです。

しかし、その大いなる破滅の日こそ、神のみ名を畏れ敬う人々にとっては「義の太陽が昇る日」であると預言者は告げています。「義の太陽」とはこの世の審判者としての神ご自身、あるいは、神のさばきを委ねられたメシア・キリストを指す、預言者が好んで用いる比喻です。その「義の太陽が昇る日」とは終末の世界の審判者としてのメシア・キリストが来られる日、つまり再臨のキリストを迎える日です。その日には、この世の高慢な支配者たちの不当な圧迫と迫害の中で、神への忠実を守り通してきた人々の上に義の太陽の光の翼が広げられ、彼らが受けてきた傷の痛みが全て癒される、つまり神の恵みによる救いの日となると預言者は告げているのです。

最初にも述べたように、今日の福音のみことばをもってイエスはご自分の受難を前にして、旧約の預言者たちの終末の神の裁きについてのメッセージを引き継いで弟子たちを力づけようとしておられるのです。この世の終わりを思わせるような大きな苦難を経験しなければならない弟子たちを励ます今日の福音のみことばは、私たち一人ひとりにも向けられています。「忍耐によって、あなたがたのいのちを勝ち取りなさい」とイエスは言われます。この世の終末を前にしたあらゆる苦難の中で、私たちがなすべき忍耐とは、第二朗読のテサロニケの教会への手紙にあるように、恵みによって与えられた神への信仰に踏みとどまり、目の前の一日一日を、神から与えられている務めの日々として、落ち着いて働いて、日々の糧を感謝のうちに得るということです。そのためにも、終末を前にしてどのようなことが起こるか分からないこの時代にあって、今日のみことばに心の耳を傾け、終末の神のさばきへの信仰を新たにしたいと思います。

今日は七五三のお祝いを迎えた子供たちとご家族の皆さんが、神さまへの感謝をおささげし、祝福をいただくためにおいでになっています。私たちも喜びをともにし、この子供たちのために祈りたいと思います。子供たちを育て、子供たちとともに生きる、親御さんたちの思いの全てを神さまが受け止めてくださいますように。心配すればきりのない日々の中で、こうして今日の日を迎えることが出来ました。このような社会の中で成長してゆく子供たちの将来を考えると、そのことにも心配の種が尽きることはありません。そのような想いの中で、今日のこの晴れの喜びの日、心を込めてこれまでのお守りに感謝し、あらためてこの子供たちを神の導きのみ手にお委ねして、これからの日々もこの子供たちのために、この子供たちとともに生きてゆく力を願って、今日の感謝のミサをともにおささげしたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高